

蕪村攷（その二十一）——寂として客の絶間のぼたん哉

蕪村が牡丹を詠みたるは二十句を越え、しかも佳句多し。

牡丹散りて打かさなりぬ二三片

寂として客の絶間のぼたん哉

有名なる句の他にも、

金屏のかくやくとして牡丹哉

虹を吐てひらかんとする牡丹かな

廣庭のぼたんや天の一方に

など氣宇大なる句もあれば、

けふや切べき牡丹二もと

牡丹切て気のおとろひし夕かな

ちりて後おもかげにたつぼたん哉

と執着を示す句もあり、暮しの萬般にわたりて蕪村句、牡丹が姿現す。執着の極みとなれるが、次の句なり。

牡丹有寺ゆき過しうらみ哉

かかる句から推察するに、蕪村は畫家として牡丹を描かんせる望み抱きをしること當然ならむと推さるるに、森本哲郎の言にあるごとく「牡丹を描きたかつたにちがひないが、：牡丹の繪は描かなかつた」こと、一知半解の筆者にも確かなる事實とおもはる。牡丹は花の王とされ、獅子の勇姿と取り合されて俗に「牡丹に唐獅子」と呼びならはさるゝ程にて、中國繪畫、日本にては狩野派、のみならず琳派も畫題としてあまた採りあげたれば、蕪村はそが安直なる風潮に抵抗を感じをりしならむ。

牡丹のみにあらず、星野鈴の證言によるに、蕪村は花鳥画を數多く描きはしたれど、その代表とさるる四君子、すなはち梅、竹、蘭、菊は畫題として採りあげることにはなきに等しといふ。例外的に梅は、京都島原の角屋に残る重要文化財の『紅白梅圖屏風』を含めて三點、竹は約十點、蘭にいたりてはまだ見しことなしといふ。ちなみに、蘭の句を探るに、繪には描かざりしも、俳諧の題材とせるは五句以上あり、内二句を。

蘭の香や菊よりくらき邊りより

夜の蘭香にかくれてや花白し

素人にも描きやすき題材を嫌ひたればならむとせる俗論には組するまでもなきが、言葉と畫像との微妙なる相關關係につきては考へさせらるるところあらむ。蕪村は文字にせる主題は繪になさず、繪にせる畫題は句に入れまじとの潔癖さ持ち合せたりと言ひ得るも、更に思ひ起すに、俳諧連歌の世界にては、前句と附句とが密着せるを「べたづけ」と呼びて嫌はるゝところに似たる關係ともいふを得。俳句を「前句」とせば、そこに附く畫は、つまり「附句」はべたづけを避くるが俳諧師の心構へとならむ。